

週刊

GAINAX総監修ビジュアル・ガイドブック

新訂版

EVANGELION

CHRONICLE

エヴァンゲリオン・クロニクル

13

定価 **690円** (税込)

2010/5/4

Mechanic Sheet

第17使徒タブリス

銃火器

Character Sheet

加持リョウジ

Tactics Sheet

第11使徒イロウル戦

Timeline Sheet

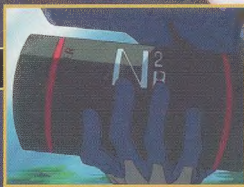
静止した闇の中で

Technology Sheet

Ⅱ兵器

Extra Sheet

用語辞典／企画書／
トピックス



**特製バインダー
発売中!**

D'AGOSTINI

雑誌 deagostini.jp

第17使徒

タブリス



ヒトの姿を纏いし

最後の使徒



SEVENTEENTH ANGEL
TABRIS

ヒトに好意を示した使徒の少年

ヒトの姿に至った使徒——それがタブリスである。その形態へと行き着いた理由は、ヒトの持ち得る「知恵」を求めた結果とも推測できるが、第一にヒトとの接触に適していたからにはかならない。いわば“ヒトという種の理解”を望んでいたのではないだろうか。その結果か、ヒトを滅ぼすはずの使徒が、接触をもったサードチルドレンに好意を持つことでヒトの行く末を案じ、自らの死を選択、使徒という種にピリオドを打つ存在となったのは皮肉といえよう。

フィスチルドレンとしてNERV本部に襲来したタブリスは、EVA式号機を操ってセントラルドグマに侵攻。最下層に幽閉されているというアダムを指し接触に成功するが、その正体はリリスだと看破する。そのとき、追撃してきた碓辛ジジのEVA初号機に身を委ねて死を望み、殲滅された。

“星に照らされる夜”の意を持つギリシア語の書物「ヌクテメロン」において、タブリスは6時のゲニウス(時間のデーモン)であり、自由意志を支配するとされる。また、カホルという3時のゲニウスは欺きを支配するという。その名の通りヒトという偽りの姿を持ち、死によって絶対的自由を得た使徒である。

タブリスは接触目標を初めからサードチルドレンと考えていたのが、それとも偶然なのか、逢魔が時である夕暮れにふたりは出合い、最初の接触を行なう。



フィスチルドレンの買収者を持ち、NERV本部の中庭へ降り込んだタブリス。使徒の本性を隠わにし、式号機を操ることで自らの武器とした。



操った式号機を初号機の足止めを用いてタミナルドグマ最深部を目指す反面、サードチルドレン碓辛ジジの追撃を心待ちにするタブリス。

DATA

呼称：17th ANGEL

第17使徒

天使名：TABRIS

タブリス

象徴：SYMBOL

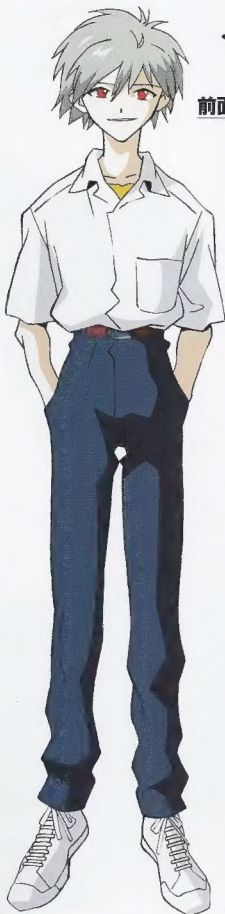
自由意志

能力：ABILITY

EVAとの同化

うそだ!! うそだ! うそだ!
カホル君が、彼が使徒だったなんて、

そんなのウソだ!
(碓辛ジジ)



前面 FRONT



顔 FACE



背面 BACK

関連項目 RELATED MATTERS

- ゼーレ
- 碓辛ジジ
- 綾波レイ
- 渚カヲル
- アダム



人類の補完を目指し暗躍する秘密結社。渚カヲル=タブリスを、フィスチルドレンとしてNERV本部へと送り込んだ。

タブリスの身体と能力

タブリスは人間の姿を有する異質な使徒である。その上ヒトとして活動する術、知性を備えており、言葉によるコミュニケーションを行なう聡明さも持つ。この姿はヒトと接触を持つために有効であり、人間社会に適応するひとつの擬態とも考えられよう。その身体はヒトと同様の血肉で構成されているものと考えられ、使徒を判別するブラッドタイプを隠す能力により完全な人間形態を持つ。実際ヒトとの接触に成功し、交友さえ深めている。なお、ヒトの心身を得たことで感情が芽生え、心をも得たのか定かではないが、接触でヒトに好意を持つに至ったという点でほかの使徒とは一線を画す。また、姿がヒトとはいえず、その能力は人間の範疇を遙かに凌駕しており、使徒の証ともいえる物理的に影響を及ぼすほどのA.T.フィールドを展開できる。

アダムの魂を宿した肉体

サルベージされたアダムの魂を内に持つというタブリス。セカンドインパクトの発生後にアダムの魂はゼーレによって回収され、浩カラルの肉体へ移された。その筆筆で中性的な肉体は誰のものベースにしているのかは不明。ただ、葛城調査隊は誰の体に対し遺伝子タイプ実験を行なっており、その提供者の肉体情報をも基にしている可能性もあるだろう。一方、再生されたアダムの肉体は碇ゲンドウの右手へと移植されている。



使徒の魂が再生した肉体と融合する結果、セカンドインパクトの発生後にアダムの魂はゼーレによって回収され、浩カラルの肉体へ移された。その筆筆で中性的な肉体は誰のものベースにしているのかは不明。ただ、葛城調査隊は誰の体に対し遺伝子タイプ実験を行なっており、その提供者の肉体情報をも基にしている可能性もあるだろう。一方、再生されたアダムの肉体は碇ゲンドウの右手へと移植されている。



相当な距離が離れていても、自分を監視していた異域ミサの反応を知っていた様子のタブリス。ヒトにはない遠感覚を有しているようだ。



EVAとのシンク比率を自らの意思で自由に設定できると、理論上あらゆる能力を見せる。



タブリスのA.T.フィールドは、物理防壁だけでなく、光波、電磁波、粒子をも遮断できる。まさに何人も併せてない境界のこの拡張が可能。

EVAとの同化能力

アダムより進られたというEVAと同化し続ける能力を持つ。これはアダムをベースとして生み出された肉体に対し、アダムの魂がより強い支配権を持つためであろう。ただし、既に魂が宿されている場合は干渉できない。なお、一旦同化すると同化対象と永久に生き続けることになるという。

試写後に宿された魂が自ら閉じこもっている状態だからこそ、タブリスは同化し続けることができた。



閉じられているとはいえず、活動に必要な中脳部分を物理的に破壊されれば活動は停止。同化は解かれる模様。



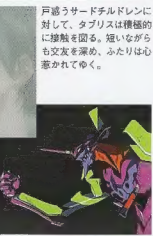
オートマチックに初号機との戦闘をこなす試写機。活動に電力は必要なく、A.T.フィールドの能力の一端か、使徒と同様に空中移動も見せている。

タブリスの活動記録

ゼーレの手より生み出され、フィフスデルドレンとしてNERV本部へ送り込まれたタブリス。サードデルドレン破滅シンジとの接触を図り、その結果、自らの存在意義を見出し、彼に好意を表明する。その後、使徒としての正体を現して活動を開始。試写機と同化してセントラルドグマに侵入し、アダムが幽閉されているというターミナルドグマ最深部へと向かう。そこで邂逅したモノはアダムではなく、リリスだと見破るタブリス。その際、追撃してきた初号機に身を委ね、自己の死で未来をヒトへと譲ることを決意。最後はシンジの手に掛かることを望み、殲滅された。

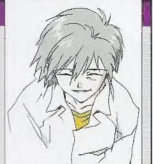


生と死を死傷償いだとシンジに語るタブリス。そして彼は自分の死一使徒という肉體の滅亡を選択することで完全な自由を得、未来をヒト(シンジ)へ譲り渡す。



タブリス侵攻記録

NERV本部へフィフスデルドレンとして好意を表明
破滅シンジと一次的接触
ゼーレとのコンタクト
セントラルドグマへ侵入
EVA試写機を操りセントラルドグマへ侵入
追撃のEVA初号機と接触、試写機が交戦
A.T.フィールドにより試写機を展開
初号機により死を避ける
自己の死を選択し、初号機により死を避ける
アダムを連れて存在を隠す
リリスと邂逅
タブリス殲滅



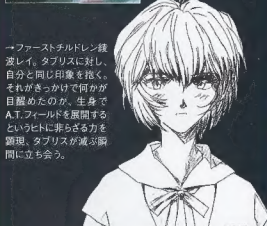
特記事項

綾波レイとの関係

「お互いに、この星で生きていく身体はリリンと同じ形に落ち着いたか——綾波レイに向けたタブリスの言葉から、レイも彼と同等の存在、すなわち人類の総相対リスの魂を持つと推測することができよう。



タブリスの張った境界の結晶A.T.フィールドに同等の力をもつて侵入したレイは、自分の魂が沈んだとしたタブリスを冷たく見下ろす。その力はやはりヒトのものとはいえない。



「お互いに、この星で生きていく身体はリリンと同じ形に落ち着いたか——綾波レイに向けたタブリスの言葉から、レイも彼と同等の存在、すなわち人類の総相対リスの魂を持つと推測することができよう。

キャラクターシート

Character Sheet

加持リョウジ

Sheet

08

RYOJI KAJI



複数組織の
間諜を務め



NERV



加持リョウジ

RYOJI KAJI

真実を
追う男

個人情報

名前	加持リョウジ
年齢	30歳
国籍	日本
生年月日	A.D.1985/06/17
血液型	A型
所属	NERV特殊監察部 ほか

特務機関NERVの特殊監察部に所属する加持リョウジ。同時に彼は、日本政府内務省調査部、さらにゼーレの间谍として活動している「三重スパイ」という特殊存在である。彼の経歴としては明らかになっておらず、判明しているのは、同じくNERVに勤務する葛城ミサト、赤木リツコらが第2東京大学に在籍していた頃からの知己であるという程度の情報である(ただし、彼自身の在籍大学は不明)。以降、NERVに入所し、ドイツ支部に勤務することとなった加持は、アスカと式号機の来日の際に護衛として同行しドイツより帰国。そのまま出向の命令を受けNERV本部に勤務することとなった。

あらゆる側面から諜報活動を続けていた加持だが、その個人的な目的は、NERVやゼーレの裏側にあるセカンドインパクトや人類補完計画の真実を知ることだったと考えられている。加持はスパイ職格という意外な趣味を持っており、本人は「何かを作る。何かを育てるのはいいぞ。いろんなことが見えてくるし、分かってくる」と口にしたが、それもまた「真実に近づく」という彼の活動を暗示していたのかも知れない。ちなみに、来日という状況の変化は彼にとって都合の良い出来事と考えられるが、これらがゼーレ、あるいは碓ゲンドウにより意図的に作られた状況だったかは定かではない。真実に近づいたら、加持の周囲には危険が増していったが、それを取っ手すずななかった。それがたまたまの好奇心であったのか、何らかの目的があったのかを断ることはなく、彼は死の間際まで真実を追い求めた。

表情



一風々として顔み所のない人物、という印象を与える顔付。無味塩と無造作に結った長髪という外見上の特徴も、そういった印象を与える要因といえよう。



加持にとって数少ない心が相通場所であるため、スパイ畑で浮かっていた笑顔は、普段よりも優しげなものだった。

一瞥し性格を窺うような、薄いつまみを浮かべている加持。どこか純粋ではないつまみは、彼の複雑な内面を押し出すための一歩だったとも考えられる。



↑笑顔でいることが多く、周囲の人々と円滑に交流している加持。胸の内を悟らせない表情を浮かべていられることは、间谍である彼にとっては武器のひとつだったともいえる。

私服



仕事でも大抵の場合は青いシャツに赤いネクタイ、濃紺のスラックスという私服に身を包む加持だが、まれに正式なNERVの制服を着ている姿も見受けられる。

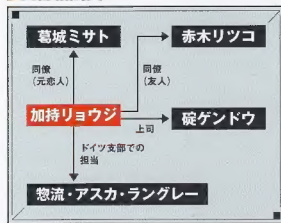
正面



側面

背面

人物相関図



関連声優

- 葛城ミサト
- 赤木リツコ
- 惣流・アスカ・ラングレー
- NERV



NERV本部所属。総務作戦部作戦局長第一課課長を務め、対使徒戦においてEVAを運用した様々な作戦を立案、指揮する。

キャラクターシート

Character Sheet

加持リョウジ

Sheet

08

RYOJI KAJI

加持 リョウジ

という存在

一人の結婚式に出席した際の姿。一応スーツに身を包んでるものの、華美さがそのままだったり、ネクタイが血がっていたりと、全体的に怪しげな印象である。



加持リョウジは、一見、軽薄そうな印象を与える男である。無神経やほぼ無造作に伸ばした髪といった外見の印象に加え、女性に対して餘面なく甘い言葉や囁くことがその要因であろう。かつて恋人であったミサトだけに止まらず、古いつきあいのあるリツコや、ほぼ初対面だったと考えられる伊吹マヤにまでもよっかいを出していたようである。ただ、ミサト以外への言葉のほとんどは、冗談の類であったことは想像に難くない。彼は、他人をからかうことしばしばで、ミサトなどはその言動に翻弄されることも多かったようである。しかしその一方で、惣流・アスカ・ラングレーには保護者として真摯に接し、シンジやミサトに対してはよき理解者として真剣に忠告を与えることも多かった。

他人に様々な側面から関わることを厭わなかった加持だが、その一方で、自身について追及された際はのりりくわしとかわし、その本心を見せることはほとんどなかった。その風貌とした性質は、自らの本心を見せたいために培われたものとも考えられる。



元々の氣質が職業柄か、多分に二面性を持ち合わせている部分。普段は風情としているが、彼にとって重要な人間と対峙する際には極めて真剣な表情を見せる。



一話の際は、基本的に柔和な表情を浮かべる加持。ただし、危険として脅か脱走を口にする際は、その職務と情婦の性質上、普段はあまり見せない機嫌な表情を浮かべることも。



アダムのサンプルを運ぶという、危険かつ重大な任務を遂行した加持。ゲンドウからも一目置かれる存在であったことは間違いない。

NERVにおける加持は、最高司令官である碇ゲンドウの特命をもって動くことが多い。そもそも、来日した真の目的も、復元されたアダムのサンプルをゲンドウに届けることであった。だが、そのほかにも情報公開法に基づいて請求された資料の操作(改竄)や、対使徒戦(第7使徒イスラフェル戦)の作戦案を提示するなど、様々な活動をこなしている。これらの事実からは、加持が特殊監察部員として情報関係に秀でているのは勿論のこと、オールマイティな能力を持つ人材であることが分かる。ゆえにゲンドウは、彼が三重スパイであることに気づきつづ、その存在を最大限に利用していたものと思われる。

NERV スタッフ

としての役割

加持と遺格者たちの間には、見た目以上に浅からぬ関係がある。まず、惣流・アスカ・ラングレーはドイツにいる頃より加持に悪心を抱いていたようで、来日してからも、彼を慕い続けていた。ただ、加持はそれを子供の憧れと判断しており、邪険に扱うことなく、大人としての対応を見せている。また加持の言葉は、様々な悩みを抱えながらEVAに採集しているシンジにも大きな影響を与えている。特に第14使徒ゼルエルが襲来した際、NERVから去ったシンジに再びEVAに乗る決意をさせたのは加持だった。加持は大人の男性として、彼ら少年少女にとって道標を与える存在であったといえるだろう。

適格者

との関係



仕事の合間をぬって、アスカの買い物に付き合う加持。特に利害関係のない少女からの誘いを多忙さを理由にして断らなかつた点からも、彼の密偵員の高さが窺える。



使徒を倒しうる適格者がシンジしかないという状況でも、加持はEVAに乗ることも強要しなかつた。幸いシンジも自ら考え、再びEVAに乗ることができたのだろう。

葛城ミサト との関係



久しぶりにふたりが再会した時、ミサトは加持の存在を心で感づいてはいるが、言葉は出さなかった。ある意味では、普段は見慣れた表情を引き出す存在ともいえる。

大学時代の友人の結婚式に出席した際、思わず加持の顔がったネクタイを盗むミサト。加持のだらしな部分から、ミサトの同性本能を刺激するのかもしれない。



「真性情で自分の感情を隠すことなく見せるミサトは、加持とはまったく異なる氣質を持った人物である。だからこそ加持も彼女に惹かれたのだろう。」

一加持が赤日した当初、豪爽するような表情をもよく見せていたミサト。香の恋人というだけでなく、作戦部長としての資質もあつたのかもしれない。



加持と同じ特務機関NERVに勤務する、戦術作戦部作戦局第一課所属の葛城ミサト一尉（後に三佐）。大学時代には恋人関係にあったふたりだが、加持が来日してからしばらくの間、ミサトは彼を避けるような素振りを見せていた。加持の方も彼女に好意を見せてはいたが、どこか冗談交じりのようでもあった。

ふたりの関係に変化が表れたのは、ミサトが加持と別れた理由を聞いた時である。その理由とは、ミサトが加持を死んだ父に重ね合わせていたということだった。その事実をミサトが語っていた際、加持は真摯な面持ちを浮かべていた。その表情からは、彼女の心情を鑑みると同時に、自分が追求めてきた「真実」を伝えることへの決意が見て取れる。その後、加持とミサトは再び恋人関係となる。女性にだけではない印象の加持であるが、ミサトに対しては特別な感情を抱いていた。自らの死を予感していた彼が、そのすべてを賭けて得た情報（セカンドインパクトの真実への手がかり等）が入ったカプセルをミサトに遺したことから、それは明らかといえるだろう。



ミサトにカプセルを渡した際の表情は、それまでに見られなかった程に真摯なものがのぞいた。ミサトにすべてを託すという強い決意が見て取れる。



久しぶりに会った友人にそっと近づき、抱きしめる加持。懐かしく感じる瞬間を見せるが、冗談とわかっていりつコは軽くいなした。



加持の水面下での動きを知っていたりつコは、その身を案じて警告する。あっさりとした言葉だったが、これは友人として本心から出たものだろう。

NERVの同僚である赤木リツコ博士は、ミサトと同様に大学時代からの友人である。ミサトの紹介で知り合ったふたりだが、どちらも自らの本心を隠すような性質を持っているためか、気の合う部分があるようだ。また、NERVの裏側の事情を知っている人間としても、どこか通じ合うものがあるのかもしれない。このふたりの会話は、胸の内に踏み込む素振りを見せつつも互いにかわっていくという、どこかゲームのような印象を与える。また時折、ふたり揃ってミサトからかうような場面が見受けられることもある。加持にとってのリツコという存在は、親友というよりも悪友に近いものといえるだろう。

赤木リツコ との関係

特記事項

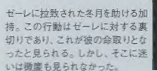
組織を股に掛ける意味

3つもの組織を股に掛けていた加持は、その立場を利用してあらゆる情報を収集していたようである。彼の目的は主にセカンドインパクトや人類補完計画の真実を知ることとあつたとする見方があるが、それを知って何に利用しようとする等の二次的の目的は持っていなかったようである。

ただ彼は「自分の中の真実に近づきたいだけ」と言うことなく口にした。彼の求めていた真実を知るためには、様々な情報を得なければならず、そのために彼は最も情報の集まるべき位置を探していたとも考えられる。それが結果として、セカンドインパクト及び人類補完計画に何らかの形で関わっているであろう3つの組織を歩きまわし、三重スパイをするという行為だったといえる。



内務省のスパイに忠告を受けた際も、何事も自分の目で確かめない気が消えない、少少だが強いていた加持。組織に裏切ても行動を制限されるのは好まないようだ。



ゼーレに拉致された冬月を助ける加持。この行動はゼーレに対する無切りのであり、これが彼の命取りとなつたと見られる。しかし、そこに達した瞬間も見えなかった。



組織を股に掛け結果、加持を待っていたのは何者にもなる数撃だった。しかし、死の直前の表情に後悔の念はなかった。



銃火器

拳銃

NERVの
携帯火器

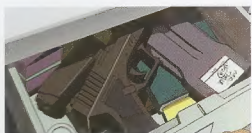
織田信長が鉄砲隊によって武田勝頼の騎馬隊を破ったという「長篠の戦い」など、近代以降の戦闘における銃火器の重要性を示す史実は数多い。

銃火器の中でも拳銃は携行できる最小火力である。有効射程が短いため軍用としての価値は低いものの、護身用としては十分な殺傷能力を持つ。また、特殊部隊などが対人制圧に用いることが多い。

軍事組織としての一面が強いNERVでは、非戦闘員でも銃の扱いが義務付けられ、射撃訓練を行っている。秘匿レベルの高い情報を扱う組織の性格上、テロ対策などの侵入者要撃のための予算も組んでおり、携帯が許されているのは一部の職員だけと思われるが、実際には多数の職員に拳銃が支給されている。しかしながら、本格的に訓練された軍事組織に遠くたくもなく、NERV本部の制圧を図る戦時自衛隊に抵抗した結果、屍の山を築くこととなった……。



新式採用とは異なる拳銃を持つ者もおり、一部職員には好みの拳銃の携帯が許されているのかもしれない。



支給された拳銃は基本的に職場へ置かれている様子。日向マコトの銃はコンソール下の引き出しに入れてあった。

Handgun

H&K USP

USP (Universal Self-loading Pistol) はドイツの銃器メーカー「ヘッケラー&コッホ」社製の自動拳銃。ドイツ軍が制式採用している軍用拳銃であり、ポリマーフレームによる軽量化とポリゴナルバルレルという六角形型バルレルにより耐久性を高めている。基本的に弾丸は9mmパラベラムを用いているが、パーツ交換により手軽に.40S&Wも使用可能。

葛城ミサトがUSPを用いるのは、かつてゲイルンのドイツ支部にいたことが理由かもしれない。



実用性の高い軍用、警察用の拳銃だが、ミサトはもっぱらムを愛用したため愛用していた。また、訓練活動を行っていた加納リョウジと、赤木リツコに使われており、皮肉にもミサトの友人に対しては銃口が向けられたことになる。

マンストップパワー(行動不能能力)の悪い45ACP弾を使用するUSP45を用いていると思われるミサト。彼女の自衛能力と相まって、戦術自衛隊の難業に際し、単身で3人を倒く間に暮っている。



グロック17

オーストリアの銃器メーカー「グロック」社製の自動拳銃。プラスチック樹脂のポリマーフレームを用いているために軽量で、内蔵式の特殊な撃鉄を持つ。弾丸は9mmパラベラムを使用し、アメリカの警官などが採用している実用性の高い銃である。



NERVの保安課採用している。敵対勢力の襲撃に際し、葛城ミサトは心臓に弾を食らった。

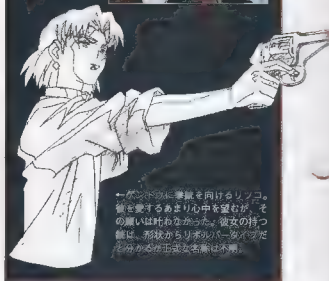


特記事項

NERVとハンドガン

NERVの保安課幹部は、その任務の性質上拳銃を携帯しているようだが、要人など一部の職員も銃の携帯を許されている様子。関連職員の間でも銃のNERVの要職に就いている者によって、危険は日常と異なる。そのため当然職責はついているものの、自衛のため拳銃の携帯が許可されているものの、ミサトなどは支給品ではない銃を携帯しており、個人的所有権を用いている可能性は高い。また、一般職員でも勤務場所の身近な場所に拳銃を常備しており、衝突の対人襲撃に対応できるような訓練されている。

葛城ミサトは心臓に弾を食らった。葛城ミサトは心臓に弾を食らった。葛城ミサトは心臓に弾を食らった。



「心臓に弾を食らった」葛城ミサトは心臓を撃たれた。葛城ミサトは心臓を撃たれた。葛城ミサトは心臓を撃たれた。

関連事項

- NERV
- 葛城ミサト
- 日向マコト



日本政府所蔵の拳銃。NERV本部担任の葛城ミサトは、葛城ミサトは心臓に弾を食らった。葛城ミサトは心臓に弾を食らった。

エクストラシート

xtra Sheet

用語辞典

GLOSSARY

Sheet

20

セフィロートの樹

ユダヤ神学主義カバラにおいて、「セフィロート」は神が様々な形で顕現したものを指し、「神性の流出」とも呼ばれる。樹状図は「セフィラード」で、赤い輝く球状として表現される。10のセフィロートを22の小径（バイン）で繋ぎ、カバラの思想を体系化したシンボル図が「生命の樹」とも呼ばれる「セフィロートの樹」で、これはあらゆるものの多様性を表すものとされる。樹の持つ10のセフィラーはそれぞれ、垂直方向の「柱」と、水平方向の「世界」によって決定される固有の性質を有す。垂直方向は中央にある「均衡の柱」、右側の「慈恵の柱」、左側の「純潔の柱」の3本の「柱」で構成され、水平方向は上から「アツィト（流出界）」、「バリーアー（創造界）」、「イェツィアー（形成界）」に位置する「活動界」の4層から成っている。樹の頂点に安置するのは、神に最も近いとされる「ケテル（王冠）」。これはほかに完全な無の世界、アインからアイン・ソフが、アイン・ソフからアイン・ソフ・アウルが生まれたのち、アイン・ソフ・アウルから現れたとされている。その下に配置された「ホクマー（睿智）」と「ビナー（理解）」のふたつのセフィラーは、神の絶対する思想を表現している。そしてこれら下のセフィラーはこれらの神の思考のもとに生まれたものであり、「ハセド（慈恵）」、「ガヴラー（弁別）」、「ティファレ（崇高）」と、続いていく。そしてその下にある、最下のセフィラーは「マルクト（王国）」であり、これが人間性の住む地上世界、物質世界を表していると考えられる。ゼーレによる人類の補充が実行された際、EVAシリーズはS機関を解放してアンチA.T.フィールドを展開、空中にセフィロートの樹の図を描き出した。また、碓氷ドングの執務室の天井にもこの図が記されているが見られる。生命の樹も同様。



初号機と9機のEVAシリーズがそれぞれセフィラーとなり、それぞれが小径で繋がることによりセフィロートの樹の構成された。

せめて、人間らしく

第3次拾遺話のサブタイトル。英文タイトル「Don't Be.」は「消滅してしまえ」の意。歌米では親が子供に対して言っていない言葉のひとつとされる。



顔も認知できます。人形を自分の子供だと思っ込んでいる。それはアスカにとって存在を否定されるに等しいことであつたろう。

ゼルエル

突如として第3新東京市東南に出現した第14の使徒。ほかの使徒には見られないほどの高い攻撃力と、通常兵器はあつても、A.T.フィールドを中絶した上で攻撃するようダメージ

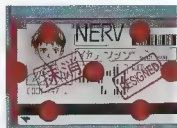
すら突破することのない高い防御力を持つ。劇中岳部線や零号に突撃したほか、第3新東京市に接近、侵入した。両腕が強力な推進力を出すことで、第3新東京市の地上とジオフロントを隔てている22の装甲板のうち18を瞬時に破壊。その後の復讐により全ての装甲板を脱落させ、ジオフロント内に侵入した。そこEVA汎号機による迎撃をもものとせず、折本城に収納していた零玖の鋭利な腕部を展開することでより一瞬にして汎号機の両腕、頭部を切断。経い番号機が、自律機によるコアを直接探った自衛攻撃を仕掛けたが、これもコアを跳避することにより回避した。その後、機體を全て排除したゼルエルはNERV本部へと侵入、第1発令所の破壊を目録むが、EVA初号機により阻まれ、ジオフロントへと後退。その後、活動停止に陥った初号機の機體装甲板を破壊、コアを破壊しようとするも初号機が再起動。その力のもとに再び痛めなく捕食されて沈黙した。なお、ゼルエルはユダヤ、キリスト教神学主義の伝承に見られる、「カ」を司る天使。ケルビエルともいい、フィヨンの書物によるとペリシテ人の巨人ゴリアテを倒したメダグイデに使われたとも書かれる。



第5使徒7ミエルが貫通し約10時間を要した該装甲板を一瞬で破壊したことからも、その攻撃力の高さが窺える。

0001-137-22

NERVにおける碓氷シンのコードナンバー。シンの持つカード等にてこの番号が記されている。



一度壊された後も、シンのこのコードナンバーに変化がなかったのかどうかは不明である。

選挙カー

第3新東京市長候補、高橋観の選挙カーのこと。発電により連絡手段が失われていた第3新東京市において、日向マコが第8使徒マリルの機體をNERV本部に伝達するべくこの選挙カーを借用した。

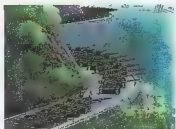


偶然通りがかった選挙カーを使用するというアイデアに、マコとの機體が顔が見える。

戦車

火砲を搭載した装甲戦車車両のこと。使徒襲来の際に駆り

出されているもの。通常兵器による攻撃ではA.T.フィールドを破ることはできないため、使徒にダメージを与えることはできない。また、NERV本部施設直接捕食の際にも戦略自衛隊保



の駆逐する限り並んが戦車も、使徒に対しては無力な存在でしかなかった。この使徒の来により零号機に全滅させられてしまふ。

先生

碓氷シンが4歳のときに預けられた育ての親。シンからは「先生」と呼ばれ、チェロは先生の勤め先で始めたものである。碓氷ドングとの関係は不明。

戦国形態

基本的に使徒撃退のための要要素として機能する第3新東京市が、使徒襲来の際などに移行する形態。この形態の際は、市内中央部のビルがジオフロント内に収容される仕組みになっている。



中央ブロック及び第1-第7号区がジオフロント内に収容され、民間人と非戦闘員が避難が行なわれる仕組みとなる。

セントラルドグマ

NERV本部の地下にある大深層地下施設。ジオフロントとターミナルドグマを結ぶメインシャフトと、その周辺に施設からなる。EVA各機のカンジ、発令所などのNERVの主要な施設は、全ての中に位置している。なお、分子生物学における「セントラルドグマ」とは、フランシス・クリックが1958年に提唱した理論で、その内容は、遺伝情報はDNA→(複製)→DNA→(転写)→RNA→(翻訳)→タンパク質の順に伝達され、その逆方向に流れることはないという主張するものである。ちなみにこの理論は、1970年にレトロウイルスという逆転写酵素を持つRNAウイルスが発見されたことにより修正された。



深層部のエレベーターはDNAを複製させる螺旋状のデザインとなっており、一般職員が使うものとは一級を越す技術を用いている。

戦略自衛隊

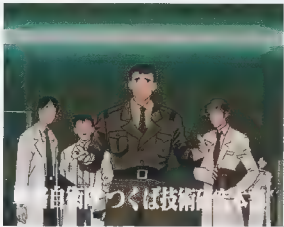
日本の国防省直属の組織。略称は「戦自」。英文表記の場合には「JAPAN STRATEGY SELF DEFENSE FORCE」で、略称は「JSSDF」となる。2003年、南沙諸島において発生した中国とベトナムの軍事衝突を機に、日本政府が固有の軍事力を必要と考えた。陸上、海上、航空自衛隊は国連軍へと編入されているが、戦略自衛隊のみは日本政府直属となっている。NERV本部にあるMAGIオリジナルのハッキングを断念したゼーレは、この戦略自衛隊（日本政府）を動かしてNERV本部施設の直接占拠を図り、その結果、一個師団が第3新東京市に投入されている。



戦自のプロである戦略自衛隊の一個師団を相手に、零・副操縦者にしては戦術を知らないNERV職員たちは対抗する姿を持たなかった。

戦略自衛隊つくば技術研本所

戦略自衛隊が、兵器の研究や開発を行なう研究機関、技術研究所（通称・戦自研）の本所。ヤシマ作戦において使用されたEVA専用改進黨電子総のプロトタイプとなった、試作自定電電子を開発した。



あまりに突然で、かつ強力な自定電電子の採用に、戦自研の責任者らしき自衛官は驚き死した様子であった。

全領域兵器/マステマ

[AW MASTEMA]。ゲーム「新世紀エヴァンゲリオン2」に登場するEVAの装備のひとつ。使徒やEVAシリーズとの戦闘に備えて開発されたオールレンジに対応可能なマルチウェポンであり、レールドシューティング風のボディは軽量で破壊力も多い。既存のシステムを用いているため操縦が単純であり信頼性が高い武器である。内蔵された兵器は、プロダクション・タイプ同様、推進力により物体を分子レベルで切り裂くことが可能な近接用ブレードのほか、ガトリング弾、出力を限定したミサイルが搭載された兵器。なお、シールドとしても使用可能。

登場作品「新世紀エヴァンゲリオン2」。

総合警戒管制室

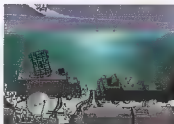
国連軍、府中総括総隊司令部の管制室。旧熱海方面より上陸する第9使徒マトリエルを捕獲、反応のないNERV本部を討つ。そのため、航空機からの肉声により使徒襲来を第3新東京市中へ伝えるように指示を發した。



府中総括総隊司令部の管制室。旧熱海方面より上陸する第9使徒マトリエルも、レーダーで捕獲した。

総合制御地点

EVA3号機の起動実験を統括する地点。換代にある第2実験場の地上に設けられた。第13使徒バルディエルによって実験場は壊滅、クレーター状になり、周辺に位置する総合制御地点にも相当の被害が出ている。エヴァンゲリオン3号機起動実験も参照。



14式大型移動指揮車など、情報処理に英で中東軍が集まって実験の制御を行なっている。

操縦席

EVA操縦席。エントリープラグ内にあるこの箇所は操縦者の身体に密着フィットするように作られており、左右には、操縦資格者の腕の動きと連動するコントロール・レバーが配置されている。



通信用ウィンドウのほか、操縦席の上には各種モニターも配置。状況に応じて、このモニターに表示される内容も変化する。

総司令官公務室

NERV本部内の一施設。総司令官が公務を行なう際に使

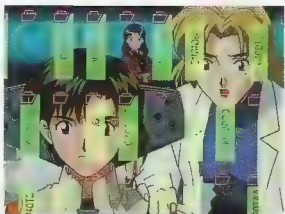
用している。広大な室内には、中央にひとつ机が配置されている以外には家具や装飾の類は一切排除されている様子。また、天井にはアタナシウス・キルヒャー著「エジプトのオアシス」に収録されたセフィロトの樹が、床にはロバート・フラッド著「両宇宙誌」に収録された宇宙宙が描かれている。



床に描かれた何もない部屋は、公認に向いているとは考えにくい。また、微妙な精神世界的な雰囲気が漂っているのかもしれない。また、この部屋の奥には、謎めいた部屋がある。

双方向回線

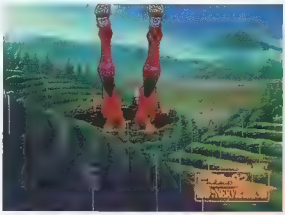
EVAと操縦資格者の神経接続の際、双方向に神経/バスの交流させる機能を持つ回線のこと。初期ユンクトクがすべてクリア後に開かれる。



双方向が初めてEVA初号機に搭載した際は、比較的に容易にA・神楽結城を行ない、双方向回線を開くことができたのである。また、その後にシグナチュラをクリアしたスタッフたちはその数値の高さも驚嘆した。

総務局3課

NERV本部の部署のひとつ。EVAのあらゆる活動などを記録する部署と思われる。第7使徒イスラファルとの初戦において、バザマな姿を晒したEVAを撮影した。



分離したイスラファルと乙によって活動停止した、EVA初号機とEVA先行機の様態を記録している。

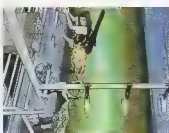
A.D.2015

●第3新東京市

01

NERVスタッフ、本部に出勤する
つかの間の平穏を満喫するスタッフたち

その朝、コインランドリーで洗濯を終えて地下鉄へ乗り込んだ赤木リツコらは、出勤途中の冬月コウゾウとばったり出くわした。冬月はゲンドウに離席を押し付けられてばかりだと目い、「MAGIがいなかったらお手上げだよ」とこぼす。赤木ナオコ博士の開発した第7世代コンピュータMAGIは、NERV本部の統括管理だけでなく、第3新東京市の市政すら担っているのだ。「まさに科学万能の時代ですね」マヤが感じ入ったようにつぶやいた。



高層階を階下行エレベーターに乗った冬月は、冬月コウゾウとばったり出くわした。冬月はゲンドウに離席を押し付けられてばかりだと目い、「MAGIがいなかったらお手上げだよ」とこぼす。赤木ナオコ博士の開発した第7世代コンピュータMAGIは、NERV本部の統括管理だけでなく、第3新東京市の市政すら担っているのだ。「まさに科学万能の時代ですね」マヤが感じ入ったようにつぶやいた。

新世紀年表

 HIGH GROUND
 新世紀年表


その日の午後、本部の11階で、葛城ミトと加持リョウジが遭遇していた。ミトはわざと「閉」ボタンを押したうえ、ギョリと駆け込んだ加賀に、あからさまに高打ちさせる。相変わらず話柄には冷たいミトである。

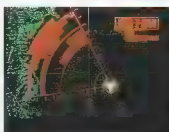
A.D.2015

●府中

02

UN軍、使徒の接近を感知する
使徒の接近にUN軍は傍観を決め込む

UN軍の管制所に、正体不明の物体が旧態海方面へ向けて進行中との報が入った。将校たちはそれが新たな使徒だと知りつつも、一様にしらけた態度を取る。「ま、俺たちができることにはないさ」冷たく吐かれた言葉にはNERVに対する反感があった。だが使徒が本土に上陸し、第3新東京市へ向かいだしたのにNERVに何の動きもないと知ると、さすがの彼らも焦りを生じはじめた。「一体、NERVの連中は何をやってるんだ!？」



正体不明の物体が旧態海方面へ向けて進行中との報が入った。将校たちはそれが新たな使徒だと知りつつも、一様にしらけた態度を取る。「ま、俺たちができることにはないさ」冷たく吐かれた言葉にはNERVに対する反感があった。だが使徒が本土に上陸し、第3新東京市へ向かいだしたのにNERVに何の動きもないと知ると、さすがの彼らも焦りを生じはじめた。「一体、NERVの連中は何をやってるんだ!？」

静止した闇の中で

THE DAY TOKYO-3 STOOD STILL



総合管成曹佐士

TASF

本土に上陸を察し、第3新東京市を目標として得意していく第9使徒の姿を、モニターで眺めるUN軍の将校たち。一方、外務との連絡が途絶えたNERVスタッフたちは、外界でそんなことが起きていたとは知る由もなかった。

2015年

NERV職員、本部に出勤する

NERV本部への電力供給がストップする

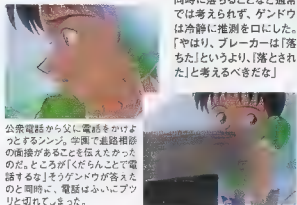
残された電力でMAGIとセントラルドグマの維持を行なう

ミサトと加持、エレベーターに閉じ込められる

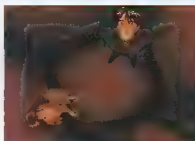
A.D.2015

NERV本部の電力供給がストップする

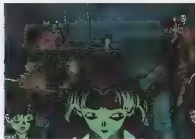
未曾有の大停電の原因は人為的なものだった。異変は突然に起こった。NERV本部への電力供給がふいにすべて断たれてしまったのだ。生き残っている回路はわずか1.2%のみ。焦る冬月が「生き残っている電源はすべてセントラルドグマとMAGIの維持に回せ!」と命じる。正、副、予備の3回路が同時に落ちることなど通常では考えられず、ゲンドウは冷静に推測を口にした。「やはり、ブレーカーは「落ちた」というより、「落とされた」と考えるべきだな」



公共電話から又も電話をかけよったシンジ。中継で遠隔相手の映像があることを伝えなかったのだ。ところが「くだらんことで電話するな」そうゲンドウが答えたのと同じ時、電話はふいにブツリと切れてしまった。



「大分が経ってもシステムが回復しないのは、NERV本部の電力供給がストップしたからかもしれない。」

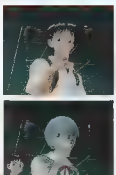


「あれほど経ってもシステムが回復しないのは、NERV本部の電力供給がストップしたからかもしれない。」

●NERV本部

シンジ、NERV本部の異常に気づく

レイやアスカから本部へ向かいながらも、シンジはさきほどの電話が不自然な切れ方をしたことが気がかかっていた。やがて本部の無人ゲートに到着した後はICカードをカードリーダーに通すが何の反応もない。「壊れてんじゃないの、コレ〜?」アスカの声がゲートに響き渡った。



無反応のゲートに思わずカードを見るシンジとレイ。

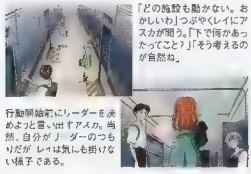


レイを押しつけてアスカも試してみますが、互ら反応はなく、遂方に喜べることに。

●NERV本部

シンジたち本部への潜入を試みる

関連施設に通じるドアが開くか試してみられるシンジたちだったが、やはりどこも反応がない。ならば本部へ直接連絡を取ろうとするが、有線の様相回線すら通じない。奇立つアスカに対して、レイは冷静に緊急マニュアルカードを取り出した。このカードには緊急事態が起きたときの対処法が書かれているのだ。ともかく本部施設に向かうということになり、3人は第7ルートに入っていた。



「どの施設も動かない。おかしいわ?」つがやくいにアスカが言う。「下で何かあったってこと?」そう考えるのが自然な。

行動開始前にリーダーを決めよつと言いつつアスカ。当然、自分が「ダー」のつもりだがレイは氣にも掛けない様子である。

A.D.2015

●第3新東京市

日向、NERV本部に向かう

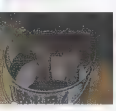
依然、連絡が取れないNERVに困惑したUN軍は、セナ機を第3新東京市へ向かわせることにした。ちょうど市街地へ出ていた日向マコトは、セナから使徒接近のアナウンスを耳にして背ぞる。「悪い?」本部へ知らせなきや。……でも、どうやって?」推して日向だったが、一台の選挙カーが近づいてくるのが目に入った。そして強引に選挙カーを乗取った日向は、一路、NERV本部を目指しはじめる。

高橋 規



その頃、空気がよまり蒸。風呂状態の本都でゲンドウと冬月だけは平然としてくると一見して、実は入り口のバケツに足を浸していた。

「行き止まりですぞよ。泣きごとを言うウグイスに聞いてから突っこめ なんせ非常時だからな!」と日向。運転手は笑った。

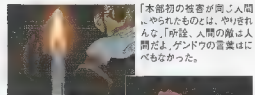


A.D.2015

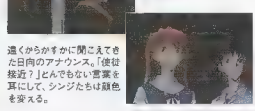
●NERV本部

レイ、使徒の接近に気づく

今回の神電は本部施設の構造調査を目的として起こされたものだ。ゲンドウは推測し、リコはダミープログラムをもってそれを阻むことにする。一方、シンジたちは聞のなかを逐々と歩いていく。ついにケンカを始めたシンジとアスカがレイが制する。「黙って……人の声よ!」彼らが耳にしたのは、選挙カーで走りながら使徒接近を告げる日向の声だった。「時間が惜しいわ。近道しましょう!」そう言うレイは、通気口を指し示した。



「本部初の地音と同じ人間にやられたものとは、やせりゃんな。」所詮、人間の顔は人間だよ、ゲンドウの言葉はにべもなかった。



遠くからずかすに聞こえてきた日向のアナウンス。「使徒接近?」そんなでもない言葉に耳して、シンジたちは顔色を曇らせる。

レイ、使徒の接近に気づく

日向、選挙カーを
乗取ってNERV本部
に向かうUN軍、セナ機を派遣して
使徒接近の報を
NERVに伝えるシンジたち、
緊急時マニュアルに沿って
本部施設への潜入を試みるUN軍、使徒の接近を
感知するシンジ、NERV本部の
異常に気づく

A.D.2015

08

アスカ、使徒の姿を肉眼で確認

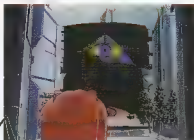
使徒の姿を最近に見たアスカは平静を装うが……
通気口を進む途中、シンジがふと口にした「使徒って何なのかな?」なぜ人類は使徒と戦わねばならないのかと考えるシンジを、降りかかる火の粉は払うのが当たり前だとバカにするアスカ。やがて3人は分かれ道に出た。アスカは自分がリーダーだから強引に行き先を決めるが、道は次第により坂になっていく。そして非常口から顔を出したアスカが目にしたのは、真昼の第3新東京市とそこを進む使徒の姿だった。



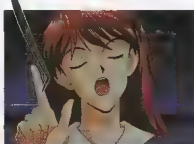
さうばなく口にしたシンジの疑問は、すぐさまアスカが一刀両断にされてしまった。



14本脚の第9使徒。昆虫のような外観だが、胴体下部には目のような紋様が配されている。



ゲートの向こうの垂直通路へ入り込む。アスカはあんなに興奮して、ドカドカと走り回っていた。



両腕を肩に担いで、急がせやいやいなのを繰り返しながら、壁に取り付くアスカ。

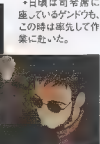
09

ゲンドウ、EVAの手動起動を指示

ヒトの力による起動準備が進む
日向の選考カーが発令所に飛び込んできた。「現在、使徒接近中! だちにEVA発進の要ありと認む!」その報告を受けたゲンドウは冬月に発令所を任せ、格納庫へと向かう。EVAの起動準備をヒトの手で行おうというのだ。パイロットもない状態で、と作業員は戸惑うが、リツコだけは「大丈夫。あの子たちは必ず来るわ」と黙って買ってみせた。



「日頃は司令席に座っているゲンドウも、この時は率先して作業にむいた。」

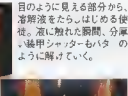


A.D.2015

12

使徒、NERV本部への侵入を開始

ついに本部施設の直上へ到達した使徒は、強力な溶解液をたらしはじめた。その真下にはEVAの昇る縦穴がある。先頭を導んでいた式号機は溶解液の直撃を受け、零号機を巻き込んで落下。一番下の初号機が手足でブレーキをかけ、なんとか底への衝突だけは免れたものの、パレットライフルを失ってしまった。やむなく横穴に退避した3人は、使徒が本部へ直接侵入する気だと気づき、今後の作戦を相談する。



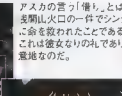
目のように見える部分から、溶解液をたらし始める使徒。溶に耐れた瞬間、分厚い装甲シッターもハタのように解けていく。

溶解液の雨をさけながら地上へ向かうは無理というもの。さらに電力供給を受けられないEVAには活動限界時間が迫りつつあった。

17

アスカ、選考作戦を提案する

アスカが作戦を思いついた。1機が防衛担当となり、他のA.T.フィールドを中和しつつ、溶解液から攻撃担当を守る。1機は穴底に落ちたライフルを回収し、攻撃役に譲る。そして攻撃役が使徒を一齐射撃するというものだ。さらにアスカは、一番危険な役割は自分ができることと申し出た。「あなたにこの前の借りは返したくないと、気持ち悪いからね。そう言ってるアスカはシンジに不敵な笑みを見せた。」



危険な役割はアスカ、バックアップ役はレイ。そして攻撃役はシンジが担当することに決まった。決意の表情を示すシンジ。

アスカの言っ「借り」とは、突如山火口の一穴でシンジに命を救われたことである。これは彼女なりの礼であり、風流なのだ。

17

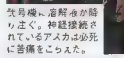
使徒殲滅作戦を開始

EVA3機の連携作戦が開始

「Gehen!」アスカが号令を出すと同時に、まず式号機が縦穴へと飛び出した。四肢を壁面に突っ張り、身体全体で溶解液を受け止める式号機。一方、底へ降り立った零号機はライフルを放り投げ、それを初号機がつかむ。シンジが叫ぶ。「アスカ、避けて!」式号機が飛びのいた直後、ライフルから放たれた弾雨が雨あられと使徒に浴びせられた。



溶解液を浴びた式号機は、機体を溶かされながらも仲間を守り続けた。



生身機、溶解液が降り注ぐ。神経破壊されているアスカは死に準備ができた。

2015年

アスカ、使徒の姿を肉眼で確認する

日向、NERV本部に到着

ゲンドウ、人力によるEVAの起動準備を指示

NERV本部に到着

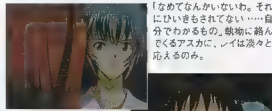
EVA3機、起動準備が完了

EVA3機、NERV本部から発進

●NERV本部

10 シンジたち、NERV本部に到着

まるで道がわかるかのように通路を進むレイに、たまたまアスカが絡み出した。「あんだ、碇司令のお氣に入りに入って。ひいきにされているからってナメないでよ！」だがレイの平然とした態度は崩れない。やがて行き止まりに出た3人は別の通気口に潜り込んだが、ちょっとしたことで怒ったアスカがシンジを蹴り飛ばした拍子で足元が崩れてしまう。ところが、幸運にも落ちた先はEVAの格納庫だった。

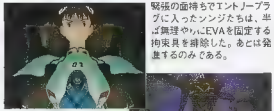


「なめてなんかいないわ。それにひいきもされてない……自分でわかるもの。格納庫に絡んでくるアスカに、レイは淡々と応えるのみ。

格納庫ではEVAの起動準備が整っている。パイロットの到着を待てるゲンドウが手動による準備を進めていると知り、シンジは驚く。

11 EVA3機、NERV本部から発進

パイロットを乗せたエントリープラグがEVAに挿入され、すべての準備は整った。ゲンドウが即座に発進命令を下す。「各機、実力と拘束具を強制除去。出撃しろ！」待てましたとばかりに拘束具を引きちぎる3機のEVA。だが、電力の落ちている状態では射出用カタパルトも当然ながら動かない。シンジたちは射出口の壁にEVAの手足を突っ張らせ、長い縦穴を地上へ向かって登っていくことにした。



格納庫、発射機、初号機の番号で射出口に入った3機のEVAは、両手両足を引っかき回してカタパルトの壁で射出口を登っていく。

縦穴の面でもエントリープラグに入ったシンジたちは、すでに無理やりEVAを固定する拘束具を崩壊した。あとが危ないのみである。

●第3新東京市

15 使徒殲滅に成功

縦穴の上に無防備に体をさらしていた使徒を、無数の劣化のプラズマ弾が貫通していく。溶解液をたらすためにA.T.フィールドを解除していた使徒はあっという間にコアを撃ち抜かれ、轟音と共に地面に崩れ落ちた。一方、試写機は縦穴を落ち、またも初号機と折り重なる羽目にも満足そうに笑うアスカに、シンジもまた微笑みを返した。



エレベーターからの脱出を目指すミサトと加持は、電力回復の拍子にもつれあい、それを利用して目撃された。「ソレって、つがやママ。

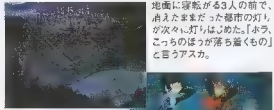
使徒の身体を買った試写機の筒、筒と筒をぐぐりと折り、たまたま使徒は倒れ伏した。こうしてEVA3機による初号機連携作戦は成功に終わった。

A.D.2015

●第3新東京市近郊

16 シンジ、使徒の侵襲理由を考える

戦いが終わり、シンジたちは戻り第3新東京市と空を眺めていた。釘りがないと人が住んでいる感じがしないと言うアスカ。「人は誰を恐れ、火を嫌い、雷を怖れて生きてきたわ。つがややくレイ、「だから人間って特別な生き物なのか。だから使徒は成り得るのかな?」シンジが疑問を口にすると、「あんだババ? そんなの、わかるわけないじゃん!」とアスカに軽く笑い飛ばされてしまった。



喧嘩もったが、力を併せて雷を避けかけた3人は雷を恐らかった。他愛ない会話を交わすこんな時間が、その凄惨なのもちろんない。

地面に寝転がる3人の前で、赤い光がまたまた爆発の音が次々に打りこみ始めた。「水、こっちはほが落ちるくらい」と言うアスカ。

シンジ、使徒の侵襲理由を考える

使徒殲滅に成功

EVA3機による連携作戦が開始

アスカ、連携作戦を提案する

EVA3機、溶解液をよけて横穴に退避

溶解液で装甲シャッターを溶かす

使徒、NERV本部への侵入を開始

タクティクスシート

actics Sheet

第11使徒イロウル戦

Sheet

16

THE ELEVENTH ANGEL YROUL ANNIHILATION BATTLE

Illustration by Anghela Moricchi



NERV本部への使徒侵入と、MAGIシステムへのハッキング。EVAをもってし、も対応不可能な状況、NERVのスタッフは科学の力で使徒と戦うのである。

本部施設への使徒侵入と、自律自爆へのカウントダウン

NERV本部への使徒侵入と、それに対抗したNERVスタッフ

TACTICS SHEET

使徒のNERV本部への侵入とMAGIに対するハッキング、そして本部の自爆未遂といった一連の事件は、第11使徒(後にイロウルと呼称)によって引き起こされたものである。本事件は、使徒との戦闘が通常の「EVA対使徒」という構図ではなかったこと、そして事件そのものが公式に記録されていないなど、極めて特殊な事例となっている。また、今回の事件の特異性を表すもうひとつの要素として、第11使徒の形態が挙げられる。

これまでの使徒がEVAと同等級かそれ以上のサイズを持っていたことに対し、第11使徒は細菌サイズという肉眼では判別できないほど極小の使徒であった。そのサイズのためか、使徒は直接的な攻撃力は持たなかったが、本部コンピュータ、そしてMAGIへのハッキングという誰も考えもしなかった攻撃を行なったのである。

この事態に、NERVも焦りの色を隠せなかった。対応に苦慮するNERVのスタッフの目の前で、使徒はMAGIへのハッキングを開始。MAGIを構成する3基のスーパーコンピュータのうちの1基、「メルキオール」を再プログラムすると、自律自爆を提議した。残る2基がこれを否決すると、使徒は「バルタザール」へのハッキングを実施。この状況に赤木博士はMAGIのログモードを変更して対応、時間稼ぎを行なっている。この時間を利用して行なわれた作戦会議において、使徒が細菌サイズのマイクロマシンであること、そして、それらが集合することで知能回路を形成、自らの置かれた環境に対応するために進化していると推測された。「進化」というこれまでにない能力を持つ使徒に対し、赤木博士上は残された「カスパー」を使用した逆ハッキングを提案する。これは使徒の進化を促進し、自滅させるというものであった。極めて短時間で立案、準備された作戦ではあったが、赤木博士の目論みは成功し、使徒は自滅、自律自爆も解除された。

第11使徒戦のおおよその流れは上述の通りである。しかし、本事件はその直前に行なわれていた実験や使徒の侵入経路、そしてそこから判明するNERV本部の構造など、いくつかの興味深い点が見受けられる。換言すれば、本件に関する事象を全て見ていくことで、NERVの実態がより深く理解できるともいえる。また、逆ハッキングにより使徒に進化、そして自滅を促した手法は、これまでの対使徒戦から見ても特殊なことであり、「人間」が使徒を撃破した唯一の事例としても記録に値する。次項より、直前に行なわれていたオートパイロット実験、使徒の侵入、対使徒戦を解説していく。

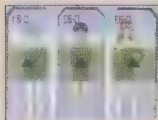


極小サイズの使徒。単体ではなく、複数の個体が集合し、知能回路を形成するという特性を持つ。

**MAGIの定期検診と
オートパイロット実験の実態**

オートパイロット実験が行なわれる当日、NERV本部ではスーパーコンピュータ「MAGI」の第127次定期検診が赤木博士の指揮の下、技術科スタッフの手によって行なわれた。検診は定期的なものであったが、オートパイロット実験に備えられたものとも考えられる。また、検診中はMAGIシステムが停止していたため、3体のEVAの آپトース作業（詳しくは作業内容は不明）はシステム再開後に行なわれることが決定していた。

その後、実施されたオートパイロット実験において、3人のEVA操縦者は17回もの身体のクリーニング作業を行なっている。これは実験区域、もしくはシミュレーションプラグ内が超クリーンルームであることが理由であった。



3人の操縦者が全身のクリーニング作業の最中。全機でシミュレーションプラグに接続するよう指示された。

特記事項

操縦者とEVAを繋ぐ、プラグスーツ

プラグスーツとは、操縦者がEVAに搭乘する際に着用する戦闘服である。多様な機能を有しており、操縦者にとってなくてはならないものといえる。



着用しなくても乗艦は可動だが、赤湾神以外には基本的に着用される。

●機能

EVAとの神経接続の補助や操縦者の生命維持などの機能を持つ。また、戦闘モードと生命維持モードのふたつ切り替えが可能。生命維持モードでは16時間の生存が可能とされる。副熱用のスーツも開発されている。

●デザイン

体に張り付くようなシルエットが特徴。左腕のスイッチで、操縦者の体型に合わせて取替える。男性用と女性用でデザインの違いが見られるが、機能は同じである。スーツの色は操縦者によって異なっている。



**■オートパイロット実験の
目的と成果**

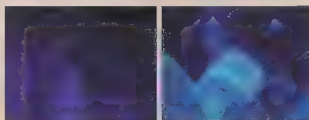
オートパイロット実験は、EVA操縦者がプラグスーツの補助を受けられること、EVAとの神経接続と一定のシンクロ率の維持が可能かを検証するための実験である。そのため、実験場所も通常の実験場ではなく、セントラルドグマ内にある「プリブノーボックス」で実施された。

■神経接続とシンクロ率の維持

実験とはいえ、プラグスーツを着用せずにEVA実験のため模擬体（人型）にエントリーした操縦者たちは、一應に違和感を訴えている。しかし、神経接続とシンクロ率の維持には問題はなく、データの収集が行なわれている。



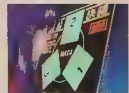
模擬体の違和感など、問題はなかったようだ。



実験においては、MAGIに接続された操縦者と、セントラルドグマ内のプリブノーボックスに接続されたEVAとの間でデータ収集が行なわれている。

■オートパイロット時のデータ収集

オートパイロット実験では、操縦者の神経接続時のシンクロ率等のデータが収集されている。通常の実験にないであろうデータは収集され、検証が行なわれるが、今回の実験は短期的に考えられており、データ収集の目的が目的とされている。

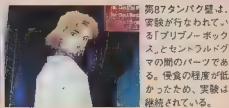
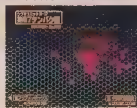


セントラルドグマの角上による新規のデータ収集が目的とされた。



■実験時における異常発見と、各所への伝達

プリブノーボックスでオートパイロット実験が行なわれている最中、発令所では第87タンバク壁に異常が発見された。ここはNERV本部の防壁であり、第87タンバク壁に出現した後に工事が行なわれた区域でもあった。そのため、工期の短縮による建材の工作精度の低下が理由と思われる。タンバク壁の異常は、プリブノーボックスにも伝えられている。



第87タンバク壁は、異常が行なわれている「プリブノーボックス」にセントラルドグマのパーツである。検査の精度が低かったため、実験は継続されている。

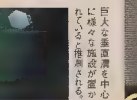
■発令所

NERV本部の中心ともいえる施設。第87タンバク壁の異常を発見。大深度施設に伝えようとして、施設全体の管理などもここで行なわれている。



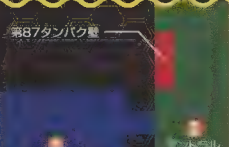
■セントラルドグマ

ネルフ本部内の大深度施設で、「中央大庭広場」とも言われる。オートパイロット実験が行なわれた「プリブノーボックス」もここに設置されている。



■プリブノーボックス

大深度施設に置かれた実験施設のひとつ。模擬体が置かれており、オートパイロット実験が行なわれた。なお、実質が確認された第87タンバク壁はセントラルドグマとこの間にあるシグマ1ユニットフロアD-17区域に設置されている。



第11使徒の侵入されたため、「プリブノーボックス」は周辺区域と共に閉鎖されている。

使徒の本部への侵入

オートパイロット実験が進む中、突如、警戒警報が発令された。これは変更が確認されていた第07タンバク壁の劣化が原因と考えられた。しかし、汚染部の発熱、周辺区域での異常発生の事象が併発、この事態に対し、赤木博士は実験の中断を命じた。また、拡大する侵食に対し、レーザーによる除去が試みられるが、汚染部が発したA.T.フィールドによって防御されている。さらに試験中の模擬体にも侵食が見られたため、シミュレーションプログラムは強制射出されている。

侵食が使徒によって引き起こされたことを察知したNERVは、プリブローボックスを破壊するとEVAを射出、さらにシグマユニット以下のセントラルドグマを閉鎖するなどの対応を行なった。しかし、増大し続ける使徒に対しては、応急的な手法であり、EVAなしでの殲滅法も未だ考案されていないかった。

技術調査

MAGIシステム

NERV本部に設置されたスーパーコンピュータ「MAGIシステム」は、初めて実用化された第7世代の有機コンピュータである。「人格移OS」とも呼ばれるこのシステムは、EVAの操縦にも利用されている。

●機能と役割

□各種試験の補助

オートパイロット実験など、EVAに関するあらゆる実験はMAGIのサポートの下に行なわれている。高い演算能力を誇るコンピュータの補助なしに、実験を円滑に実施することは困難である。



その演算能力のおかげで、実験回数が大幅に増加された。

□本部のメインコンピュータ

MAGIはNERV本部のメインコンピュータとしての機能も持っている。NERV本部で使用されているあらゆるシステムやコンピュータはMAGIの管理下にあるといっても過言ではない。



多岐にわたるMAGIの制御業務は、特に重要視された。

□第3新東京市の市政

ジオフロント直上にある第3新東京市の市政も実質的にMAGIが行なっている。もちろん市議会が存在し、議員も在籍しているが、市政などはMAGIが取り決めていると見られる。



第3新東京市の市政も、実質的にはMAGIが行なっている。

●開発者

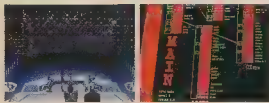
MAGIの基礎理論と本体は、NERVの編成であるがレオンおに、赤木博士も大きく関わって作られたものである。博士の死後、実験で使った赤木博士博士によるプログラムのアップされた。



赤木博士がOSの開発者であり、3体のコンピュータに基いた異なる3つの人格を移植した。

■「人間」による使徒との戦い

侵食を続ける使徒は、遂にMAGIをハッキングした。使徒はメルキオールを再プログラムするの自由を奪取し、それが解決されるとバルタザールに対し、ハッキングを開始した。EVAという対使徒戦唯一の戦力を行使できないNERVは、かつてないほどの危機に陥った。

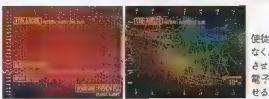


部と見なされていたソフへの侵入を身も付けた使徒は、本部のシステムを解析、遂にMAGIへアクセスした。

TACTICS SHEET

1 使徒の生態の特定と対策

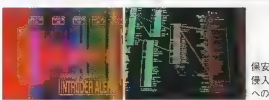
使徒がソフを弱点としていると考えた赤木博士は、ソフの注目を開始。同時に使徒の活動を低下させることに成功した。しかし、ソフへの耐性を身に付けた使徒はその後、爆発的に増加し始めた。



使徒は増加しただけではなく、その形態も変化させた。その変化は電子回路の乱れを思わせるものがあった。

2 使徒、ハッキングを開始

NERVのサブコンピュータが突如ハッキングをかける。ハッキングは3種の艦下、つまりプリブローボックスから、使徒によるコンピュータへのアクセスが行なわれていた。



保安部のメインバンクに侵入した使徒は、MAGIへのアクセスを試みた。

3 MAGI、使徒にハッキングされる

使徒によるハッキングが行なわれる中、司令室は10システム（電源）をシャットダウンして、MAGIへのアクセスを阻止しようとした。しかし、これも失敗、遂にメルキオールが使徒にハッキングされた。



メルキオールを乗っ取った使徒は自ら意思を操縦。これが苦害されると、バルタザールのハッキングを開始した。

4 使徒殲滅の手法の提示

ロックコードの盗襲により、時間を稼ぎ、NERVは使徒への対応案を協議した。遠城（使徒からはMAGIの物理的消去）が提案されたが、赤木博士はこれを拒否、使徒の特性を利用した殲滅法を提案した。



赤木博士の作戦はこの段階では唯一の対応案ではあったが、残された時間はわずかな時間のみであった。

5 作戦の開始

作戦の発動に伴い、NERV本部には2D機動機の退去命令が出された。その後、カスパーで対使徒用の自滅促進プログラムの準備が行なわれた。



警備用と思われるカスパー一内の通路には、閉鎖する赤木博士が居た。居た人間のメモがあった。

6 1秒前の勝利

赤木博士たちが準備を行なう中、遂にバルタザールがハッキングされ、自爆自壊が決定された。カスパーが乗っ取られる直前、自滅促進プログラムが起動し見られ、使徒は自滅した。自爆の1秒前であった。

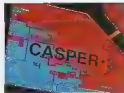


使徒の殲滅に成功し、自爆自壊は決定された。MAGIも元の状態に復旧した。

■赤木博士の戦略——逆ハッキングによる自滅の促進

① 逆ハッキング

使徒に対し、赤木博士はカスパーからの逆ハッキングを提案した。これはコンピュータを支配下、敵に使徒に対して唯の効果的な手段だと思われる。



「逆ハッキング」は、コンピュータを支配下に置き、敵に使徒に対して唯の効果的な手段だと思われる。

② 進化的促進による絶滅

進化の終極点は自滅、という理論の適用通り、赤木博士は、逆ハッキングによる、進化、つまり自滅を促進させるプログラムを使徒に送り込んだのである。



「逆ハッキング」は、コンピュータを支配下に置き、敵に使徒に対して唯の効果的な手段だと思われる。



① 使徒はハッキングにより「自爆自壊」を遂行
② 逆ハッキングで「自滅促進プログラム」を送り込
進化させた使徒は自滅

作戦報告

第11使徒戦の戦訓と特例

この第11使徒戦はこれまでの対使徒戦の中でも異色の戦いであった。しかし、特例ともいえる今回の戦訓にも今後の課題となるべきものがあり、それを活かすことで多角的な対使徒戦の展開が可能となるはずである。

① 使徒の多様性の再確認

第11使徒は、戦闘サイズという肉體でも種族でも異いほど極小の使徒であった。これまでとは全く異なるサイズと集団で働くという特性は、今までにない彩感といえよう。



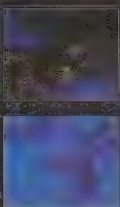
EVAによる物理的な破壊も不可能に近いサイズのため、新たな戦術が必要となる。

② EVA非運用時における方針の確立

今回の使徒戦では、EVAは使徒の侵襲を避けるため、ケージから射出されている。極めて稀なケースとはいえ、EVAのない状態での対使徒戦における方針の確立も必要と考えられる。



「特別出動部隊」を率いる指揮官として、今回の使徒戦に臨む。彼女の冷静な判断と的確な指示が、我々の勝利を導く鍵となる。



今回は特殊な状況で、EVAが運用できない状態での対使徒戦となる。この経験を活かし、今後の戦術を確立していく必要がある。

追加報告

知らされなかった第11使徒の襲来

第11使徒の襲来とNERV本部への侵入は、公式記録には残されていない。これは総司令が人類補完委員会と日本政府に報告しなかったためと推測されている。なぜ、彼がこのような行動を取ったかは不明である。



襲来への対応を命じた総司令は、委員会と政府には「無視」と報告するよう指示している。



使徒の侵入という事実は、我々の知るべき情報ではない。我々の使命は、人類の存続と世界の平和を守ることにあり、それ以外のことは我々の管轄外である。我々の任務は、あくまで人類の存続と世界の平和を守ることにあり、それ以外のことは我々の管轄外である。



多岐用途で開発された、全く新しい生物を見た使徒。また、蟲化という生物的な能力を見せるなど、その多様性を見せ付けた。

n兵器

n WEAPON

「ヒトの歴史は闘争の歴史」とは、もはや使い古された言い回しだが、そのなかに一片の真理を含んでいるのも事実である。生命の大命題は生き延びることであり、単細胞生物から霊長類に至るまで、生命は常に戦いの場に身を置いてきた。そんな闘争の繰り返ししなかで、効率的に生き延びる手段（＝戦いに勝利する手段）を模索したのがヒトであり、そうして生み出されたのが武器だった。はじめは手の延長にしか過ぎなかった鈍器が、攻撃範囲を拡大すると共に槍、弓、鉄砲となり、さらに科学技術の発展と相まって様々な武器が誕生していった。そして20世紀末、ヒトは究極的な武器である核兵器を生み出し、もともと強力な「戦いに勝つ手段」を手に入れることになったのである。ところが核兵器の出現によって、武器の持つ意味合いが大きくシフトすることとなった。本来の武器は「効率的に生き延びる手段」として生み出されるべきだが、核兵器はヒトが生き延びる道を閉ざしかねなかった。つまり核兵器は強力過ぎたのである。その破壊力は広範囲に及ぶだけでなく、残留放射線がヒトの居住環境を長年に渡って脅かす危険性が高い。生き延びるために核兵器を使用するのは、あまりにリスクの高い賭けとなってしまったのだ。20世紀末に勃発した米ソの冷戦は、両国が保有する核兵器をバックボーンとした読み合いであり、使いたくても使えないというジレンマが表面化した状態と見ることもできよう。そのため大国を中心とする核保有国は核兵器の拡散防止（最終的には核兵器の廃絶）をスローガンに掲げ、核兵器は次第に歴史の塵にその姿を消すことになったのである。

新世紀において核兵器の有無は不明であるが、代わりにn兵器と呼ばれる兵器が開発されている。そのスペックや詳細なデータは伝えられていないが、あまりに大き過ぎる威力を持っているならば、n兵器の辿る道は核兵器と同じであろう。ただし新世紀は20世紀末とは決定的に異なる。セカンドインパクトによって既存の社会構造が崩壊し、UN（国連）主導の画一的システムが敷かれているためだ。つまり米ソが脱み合ったようにUNを牽制する組織は存在せず、何らかの危懼状況に陥れば、UNはn兵器の使用をためらわないだろう。事実、西暦2015年、危機的状況は予想外の形で襲来したのである。



- 第3使徒サキエル戦
- 二点同時適量攻撃戦
- 第10使徒サウエル戦
- 第14使徒ゼルエル戦
- NERV強制稼役



核兵器が通用しない時代に、兵器の用途や使用を決定する機能をもつもの。大した損害を与えずに、撃つことができた。

名称から推測する特徴と核兵器との相違点

種類と特徴

n兵器の正式名称は「No Nu clear」もしくは「Neo Nuclear」だと言われるが、正確なところは不明である。とはいえ名称から推測する限り、n兵器とは核兵器と異なる兵器であり、核兵器に次ぐ兵器であることがわかる。恐らくは破壊力はそのままに残留放射線問題をクリアしたのだろう。

また弾頭サイズが通常ミサイルに搭載可能なほどコンパクトなことからn兵器の運用性は飛躍的に高まり、それが核兵器に取って代わる大きな要因になったと考えられる。とはいえ核兵器と同様、厳重な管理が必要なおことには変わりなく、n兵器を保有する国家や組織の管理体制が問われるところである。

第3使徒を観察していたミサイルは、展開するUN軍艦空母が撤退する様子からn兵器の使用を悟った。



橋的に直接接触させて破壊させることもある。至近距離の爆発なので効果は高いが、危険も伴う。

圧倒的な威力に対処法

威力と影響

前述したように核兵器と同等の威力を有すると思われるn兵器だけに、その使用には細心の注意が必要となる。放射線の危険性はほとんどないとはいえ、圧倒的な爆発力もそれだけでも危険極まりないものだからだ。そのためn兵器の使用にはあらかじめ爆心地から一定以上の距離を取っておく必要がある。さらに熱波や爆風の影響を考慮して、遮蔽物や避難壕、地下施設に避難しておくのが理想的だ。ただしA.T.フィールドならばn兵器の爆発にも耐えられるため、もっとも安全なのはEVAパイロットといえるかもしれない。

NERF本部の大スクリーンとはいえ、n兵器の電磁波の影響は回避できず、画像はノイズに覆われてしまう。



ジオフロントのような閉鎖空間内でn兵器を使用した場合、電磁波の影響はさらさら拡大される。

■4系統に分類されるn兵器

現在までに確認されているn兵器には以下の4系統が存在する。とはいえ系統ごとにも能力に差があるわけではなく、主に設置方法や射出方法によってカテゴライズされている。このことはn兵器の使用に特別な方法やシステムが

必要なく、既存兵器と同じ手法で使用できることを示している。この点からn兵器の優れた運用性と、将来的な飛躍の可能性がわかるというものが(未確認だが)EVA専用兵器としてnミサイルが開発されたとの報告もある。

●n2爆弾

ほぼ弾体に近い状態のn兵器であり、ミサイルの弾頭に接続した1、発射装置で標的に射出することで使用する。宇宙機が機体との接近軌道に用いられることもある。



●n2地雷

n爆弾に時限式信管もしくは無設置作信管を配置し、標的の接近を持って起爆するもの。爆発に指向性を持たせることで、あらゆる威力拡大も可能となる。



これはn2爆弾のイメージ図。EVAが片手で保持できるほどのサイズであり、取り回しの点にも優れている。ほかの系統のn兵器は、このn2爆弾を基礎として生まれたものである。

●n2爆雷

n爆弾に近接信管を設置し、一定距離内に標的が入った際に起爆するようにしたものである。航空機から投下されるが、水中の標的にも有効と思われる。



●n2航空爆雷

ミサイルの弾頭部分にn爆雷を搭載したもので、弾頭は単体だけでなく多弾頭タイプも存在する。主に成層圏以上の超高空を飛行する標的に対して使用される。



■衝撃破と電磁障害

n爆弾が爆発すると、爆心地を中心に極めて高温・高圧状態の衝撃波(熱波)が発生する。爆心地付近の物体は瞬時に溶解し、離れた地点の物も爆風によって吹き飛ばされる。また熱波が通り過ぎても激しい気圧変化から吹き飛ばしの現象が発生し、これによって爆心地から一定範囲内には爆傷が発生することになる。さらにn兵器の爆発は超高温の電磁波を生み出し、これは電子機器に顕著な動作障害を生じさせる要因となるものである。



熱波はほぼ音速で瞬発するため、気づいてから避けるのはほぼ不可能。その威力は、爆心地から充分に離れていても乗用車を破壊するほどである。

■爆発後の影響

残留放射線の影響がないn兵器だが、それ以上に問題なのが地形への影響である。第3使徒との戦闘では箱根近郊の山岳地帯に埋設されたn地雷の爆発で、爆心地を中心とする巨大なクレーターが生じた。莫大な熱量によってクレーターの内壁はガラス状に溶け、植物が生育できる土壌からはかけ離れたものとなってしまった。また第7使徒に対しては海岸線にn爆雷が投下されたため、海面下の地形に大きな影響を与えることとなった。



第7使徒の動きを封じることに成功したものの、爆発の影響で紀伊半島沿岸部に半円状の新たな海岸線が形成されることになってしまった。

特記事項

旧東京を壊滅させた新型爆弾

西暦2000年9月20日、セカンドイベントによって大被害を蒙った東京に、テロリストが新型爆弾を投下。これによって東京は完全に破壊し、首都機能を豊野の松本市(のちの第2新東京市)に移管せざるを得なくなった。この時に使用された爆弾もn兵器だとする向きがあるが、それを事実とする記録はなく、テロリストの武装入手経路も判然としていない。



南緯の水が凝結したため海面が数十mも上昇したところに新型爆弾を投下された東京は、一瞬にして廃墟と化した。かつて「花の都」と謳われた面影はとどこも残っておらず、2015年になってようやく戻されたままの状態である。

■ 第1例

攻撃目標
第3使徒 サキエル使用兵器
n地雷

西暦2015年、使徒と呼ばれる正体不明の物体に人類が遭遇した際に、n兵器が使用された。海中から日本沿岸に接近した第3使徒は熱海沿岸に上陸。御殿場地区を突如切る形でNERV本部が位置する箱根方面に侵襲を開始した。これに対してUN軍は本拠地に戦車部隊を配し、御殿場市内には大型火砲と攻撃機による防衛ラインを敷いた。だが使徒の侵襲を止めることはできず、箱根山岳地帯に到達した使徒に対するn地雷の使用が許可された。



使徒は爆心体の近接距離に位置していたため激震は致命と思われた。しかし使徒は健在であり、攻撃手段を失ったUN軍高層たちは一種に突然とするしかたなかった。

■ 第2例

攻撃目標
第7使徒 イスラフェル使用兵器
n爆雷

日本近海の警備を担当するUN軍潜水艦はながら、紀伊半島沖を航行する巨大な物体を発見し、これを第7使徒と確認した。NERVはEVA初機と弐号機を撃墜させ、上陸直前の水際での激震を試みた。しかし弐号機の一撃で両断されたと思えた使徒は2体に分裂。不意を突かれた初機と弐号機は散々に壊滅してしまう。事態を重く見たUN軍はだちにn爆雷を投下。使徒の機体には至らなかったものの、その足止めには成功している。



n爆雷の熱波は使徒外殻の28%を蒸発、使徒が再生する間、EVAパイロットは使徒機体を手帳を貫通することによって、再機体は発生し、機体は成功している。

■ 第3例

攻撃目標
第10使徒 サハウエル使用兵器
n航空爆雷

インド洋上空に出現した第10使徒は、分裂させた体の一部を質量爆弾として利用のタイプと判明。しかも自らの攻撃を経て断定修正を行なうほどの知性を有しており、次の攻撃ではNERV本部を直撃すると予想された。UN軍はn航空爆雷による激震を試みた。撃破はあろうか、目立った損害も与えられなかった。使徒が位置する場所が大気圏上層部であり、n兵器の熱波が吸収してしまったために充分な威力を発揮できなかったものと思われる。



使徒の攻撃によって大地には激震のクレーンが起きた。また、NERV攻撃時には使徒本体が直接降下してきたが、EVAS体による遠隔攻撃で機体は破壊された。

■ 第4例

攻撃目標
第14使徒 ゼルエル使用兵器
n爆弾

突如、何の前触れもなく出現した第14使徒は、第3新東京市の東南に位置する駒ヶ岳防衛ラインを鼻くち突破。光線の一撃でジオフロント上部の特務装甲板を破壊し、ジオフロント内部に侵入した。迎撃に向かった弐号機は瞬時に撃破され、使徒はNERV本部への攻撃を開始する。その時、綾波レイの搭乗する零号機が使徒に突撃。n爆弾を使徒のコアに密着させた状態で起爆させた。だが爆発の前、コアは装甲板で覆われ、破壊には至らなかった。

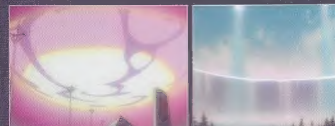


使徒の崩壊したA.T.フィールドにn爆弾を押し込めようとする零号機。A.T.フィールドの突破には何となく成功したものの、機体は失敗している。

■ 第5例

攻撃目標
ジオフロント表層部使用兵器
n爆弾

すべての使徒の機体は成功したものの、ゼールの管理下を離れた碇ゲンドウは独自に「人類補完計画」を進めさせる。これに対してゼールは戦略自衛隊の投入を決定し、NERV本部の武力制圧に乗り出した。まずNERVと外界を繋ぐ情報網をカットし、さらにジオフロントにつながる連絡通路を封鎖した戦略自衛隊は、n爆弾でジオフロント表層部を破壊している。この時に使用された兵器は「n判道ミサイル」とも言われるが、詳細は明らかではない。



直上から投下されるn爆弾は、機体は成功したものの、機体は失敗している。地上、大気圏上層部、そして地上に降下したn爆弾は、機体は成功している。

使用例と効果

2015年に出現した第3使徒に対して用いられたn兵器を皮切りに、n兵器は計回に渡って使用されたことが確認されている。その標的はほとんどが使徒であるが、A.T.フィールドと呼ばれる絶対防壁にはさしものn兵器も歯が立たず、活動停止に追い込むのが精一杯だった。とはいえEVAを除けば、ヒトが使徒に対抗できる兵器はn兵器しか存在せず、これはまさに最終手段だったのである。その一方で、n兵器はヒトに対しても使用されている。ゼールが主導となったNERV本部採取における戦闘がそうであり、この時に使用されたn爆弾は多大な効果をもたらすに至った。使徒に対して絶対的な防壁力を持ったNERV本部も、n兵器の前には意外な脆さを露呈することになったのである。

n兵器の攻撃に耐えた第3使徒は、機体要素を復元しただけでなく、新たな能力を身につけさせた。



ジオフロント表層部を破壊したn兵器は、NERV本部施設にも破壊的な被害を与えている。



特記事項

使用されなかったn兵器

前述した例とは別にn兵器が準備されていた戦闘記録がある。ひとつは浅間山火口内に遭遇した第6使徒との戦闘である。使徒機体は失敗した場合、上空に待機するUN軍航空部隊がn兵器を投下し、上層ごと使徒を吹き飛ばす予定だった(幸いなく)に、上層ごと使徒機は壊滅。浅間山の景観は失われずすんだ。もうひとつは第12使徒に飲み込まれた初号機救出作戦である。使徒が形成した虚数空間(ディラックの海)に飲み込まれた初号機をサルベージするため、n兵器の爆発力を利用しようとしたのだが初号機は自力脱出に成功し、n兵器は使用されることはなかった。



航空機を自撃したシブジはそれを爆撃と勘違いしたが、実際にはEVAもとも使徒を吹き飛ばす役目を持てなかった機体だった。



n兵器を使った初号機のサルベージ計画は赤木リツコ発案によるものだが、それは成功の確率が極めて低いものだった。



有史以来、ヒトは様々な兵器を手に入ってきたが、その究極的なものがn²兵器である。とはいえ強力過ぎる兵器は使用者に危害を及ぼすことが多く、n²兵器もそれは例外とはいえないだろう。特に運用性に優れるn²兵器だけに、その使用には高い倫理観と状況判断能力が必要とされる。EVAを除けば使徒に対する唯一の切り札であるn²兵器だが、使用者の意思次第で悪戯を仕かけかねないのである。

強力過ぎる兵器を保有することの代償

保有国と組織

圧倒的な破壊力を有するn²兵器だけに、その保有には各種制限が設けられてしるべきである。充分な考えもないうままにn²兵器が使用されれば、セカンドインパクトから復興した世界は再び混乱状態に陥りかねないからだ。現在、n²兵器はUN軍をはじめとする限られた組織が保有しているが、使用は保有者の一存に委ね

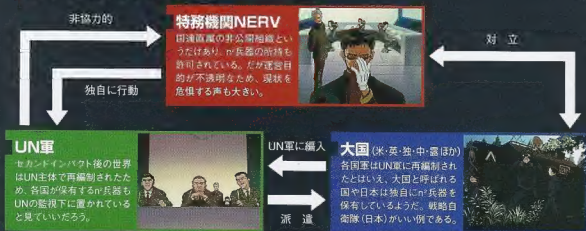
られており、これは危険な状態と言わざるを得ない。

UNにも絶大な影響力を持つ一方だけに、n²兵器の使用許可を下すのは容易なことだったと思われる。



各自上はn²兵器の管理を託されたUNだが、実際にはそれぞれの指示や命令のもと従っただけだったようだ。

n²兵器保有組織とその関係



特記事項

n²兵器の総数

世界中にn²兵器が何基存在しているのかについては不明だが、ひとつの重要な記録が残されている。第12使徒に取り込まれた船号機を救出するためn²兵器の使用を求めたリッコの計画書によると902機のn²兵器を同時に起動させる予定だったらしい。公式には、これが現存するn²兵器の総数らしいが、秘密裏に保持する組織もあると思われる。



リッコの要請によって第9新東京市上空にn²機雷を搭載した航空機が飛来。それぞれの機体が複数機のn²機雷を投下する予定だったようである。



有史以来、ヒトは様々な兵器を手に入ってきたが、その究極的なものがn²兵器である。とはいえ強力過ぎる兵器は使用者に危害を及ぼすことが多く、n²兵器もそれは例外とはいえないだろう。特に運用性に優れるn²兵器だけに、その使用には高い倫理観と状況判断能力が必要とされる。EVAを除けば使徒に対する唯一の切り札であるn²兵器だが、使用者の意思次第で悪戯を仕かけかねないのである。

強力過ぎる兵器を保有することの代償

保有国と組織

圧倒的な破壊力を有するn²兵器だけに、その保有には各種制限が設けられてしるべきである。充分な考えもないうままにn²兵器が使用されれば、セカンドインパクトから復興した世界は再び混乱状態に陥りかねないからだ。現在、n²兵器はUN軍をはじめとする限られた組織が保有しているが、使用は保有者の一存に委ね

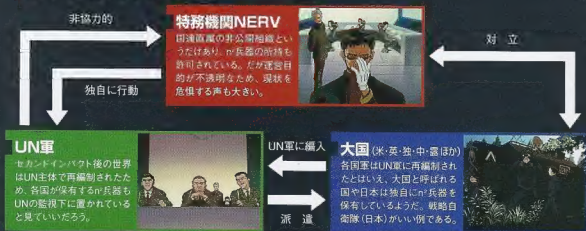
られており、これは危険な状態と言わざるを得ない。

UNにも絶大な影響力を持つ一方だけに、n²兵器の使用許可を下すのは容易なことだったと思われる。



全目上はn²兵器の管理を託されたUNだが、実際にはそれらの指示や命令を無視して従っただけだったようだ。

n²兵器保有組織とその関係



特記事項

n²兵器の総数

世界中にn²兵器が何基存在しているのかについては不明だが、ひとつの重要な記録が残されている。第12使徒に取り込まれた船号機を救出するためn²兵器の使用を求めたリツコの計画書によると902機のn²兵器を同時に起動させる予定だったらしい。公式には、これが現存するn²兵器の総数らしいが、秘密裏に保持する組織もあると思われる。



リツコの要請によって第9新東京市上空にn²機雷を搭載した航空機が飛来。それぞれの機体が複数機のn²機雷を投下する予定だったようである。